

【創刊 10 号特別寄稿】

民族学と考古学—学問の系譜 学問遍歴をたどって

岡田 淳子

序. なぜ、今このテーマか？

北方民族博物館は、道立博物館として地域のセンター的機能を担わねばならない。また、同じ道立博物館である北海道開拓記念館との役割分担をどのように考えるか。この二つを課題として与えられた。私の立場としては、博物館の持つ研究分野をはっきりさせ、そこから展開するのが良かろうと考えた。そこで当博物館の役割を本来に立ち返って考えるために「民族学と考古学—学問の系譜」というテーマを設定した。

しかし、学問の系譜を理論的に語るのでは、把握している専門家にとっても、初めて聞く専門外の人にとっても面白くないに相違ない。公にする恥ずかしさを顧みず、私自身が歩んできた道を筋にして、話を進めることにした。

1. 考古学は歴史学の分野にある？ (Archaeology/Prehistory/History)

日本の考古学教育は通常、大学の「歴史学分野」で行われてきた。日本では考古学で扱う文字の無い時代まで遡っても、民族の歴史が迎れるので、当然のことだった。

中学生の時、それは太平洋戦争中だったが、日本歴史の教科書は神話の「国生み物語」から始まっていた。それを史実として信じていたわけではないが、戦後、教科書を筆と墨で黒く塗り潰しながら「これに代わる歴史を見つけなければならない」と思っていた。そこに現れたのが考古学であり、まさに日本歴史の初めの一頁につながる作業であったと思う。このような経験は私だけでなく、「なぜ考古学者になったのか」という問いに、似たような答えをしている同年輩の人に何人も出会っている。そこには確かに「日本歴史を明らかにするための学問」という側面があった。

日本以外の国や地域で見ると、必ずしもそうではない。非常に分かりやすい例としてアメリカ合衆国について考えると、国の歴史はメイフラワー号でヨーロッパからやってきた人たちが建国してからの僅か 250 年であって、考古学はかつてインディアンと言われたアメリカ先住民の祖先の研究であり、自己の民族の歴史とは関係がない。そこで考古学は決して歴史学科には入らず、「人類学科」の中にあることが多い。民族の興亡が激しい地域ではもっと複雑で、それ自体が研究のテーマになり、ヨーロッパでは *archaeology* と *prehistory* に分かれて別学科に属するところが多いなど、文明化や学問の移入と関係してくる。日本で考古学が専門的に学べるようになったのは、京都大学と東京大学の人類学を除き、第 2 次世界大戦の後である。

1948 (昭 23) 年は、日本の帝国主義が崩れ、新しい学制ができて学問が解放された年であり、考古学の分野では発掘調査が盛んに行われるようになっていた。私はこれを「第 2 次考古学ブーム」と位置付けている。そんな時、私の通う高校の校庭で遺跡が発見され、新校舎を建てるための発掘調査が行われた。朝礼で、「明日から考古学の先生たちが発掘を始めるので、興味のある生徒は参加しなさい」とアナウンスがあり、私はこの時とばか

り、参加を決めた。発掘を指導した先生たちは、昭和初期の「第1次考古学ブーム」¹に考古学を始めた東日本を代表する考古学者たちである。古墳時代の堅穴住居址（建物跡）を掘って「ぱりっ、ぱりっ剥がれるのが床面」と教えられ、1500年も前に人が暮らし、生身の体が触れた面かと思うと、タイムスリップなどとは表現できない厳粛なものを感じた。これがきっかけになって、私は考古学の道に進む。調査中の登呂遺跡に出向いたり、東京で唯一の考古学博物館だった井之頭公園内の武蔵野博物館で、土器の型式を学んだりした。

大学では考古学を専攻し、当時としては初めて理想的に用意されたカリキュラムで学ぶと同時に、休暇期間には教員の発掘現場を手伝い、遺跡や遺物を見学しながら旅する日々が続いた。同級生には高校時代に最寄貝塚、登呂遺跡、鉦切洞窟²などで考古学の手ほどきを受けた人々が一緒だった。私はそのなかで初めての女子学生として育てられた。

ところが考古学を学ぶ若者たちが「考古学は歴史学の一環である」といくら唱えても、当時古代史研究者以外の歴史学者たちには受け入れられなかった。文字をもたない考古学の片想いだったのだろうか。2年間にわたって私たちはレポートを提出し続けたが、遂に著名な歴史学者を動かすことはできなかった。その後、私は4年間追い求めた『古墳時代の土器の研究』を論文にして学部を終えた。この時点では50年毎の型式設定しかできなかったが、今では優秀な後輩によって、20年毎の型式認定が可能になっている。伊勢神宮の「式年遷宮」が20年毎だから、意味のある数字だと思う。

日本歴史をたどる考古学は、濱田耕作（青陵）が京都帝国大学に創設した考古学研究室を核にして、今も研究がすすめられている。濱田は1909年に京都大学に奉職し、考古学ばかりではなく1937年には総長にも選ばれて活躍した。発掘調査の克明な記録を報告書として残す伝統は、ここで打ち立てられたと言われている。

考古学を日本歴史とは無縁で始めた人たちもいる。日本では江戸時代から石器が認識されており、「雷石」、「星屑」などと記されていた。新井白石により、石器の図も残されている。

19世紀の最後の4半世紀、明治10年頃から、大森貝塚に着目したエドワード・モースや、層位学の手法を広めたジョン・ミルン³が日本考古学に貢献したことは有名で、日本における科学的考古学の幕開けでもあった。

縄文時代を研究していた尊敬する先輩の考古学者の一人は、研究を始めたきっかけについて「生来ものを拾うことを好み…」と書いている。この辺が考古学へ誘われるもう一つの鍵（カギ）だったのだと思う。このグループは、当然ながら先史学または先史考古学と呼ばれる日本建国よりかなり古い時代を研究の対象にしていた。同じく戦後、群馬県岩宿で関東ローム層の中から土器を伴わない石器文化が発見されて、日本に人の住んだ時代がそれまで理解されていたよりずっと古い旧石器時代まで遡ることになった。

これらを機に専門家の集まりである「日本考古学協会」が創設され、発掘調査は日本考古学協会の会員でなければ許可されない、という縛りも設けられた。遺跡破壊を起こさないためである。「考古学年報」が編まれて、毎年の発掘調査が記録に残された。

1948（昭23）年5月の連休に、民族学者と考古学者による日本民族・文化の源流と日本国家の形成という対談と討論が行われた。両学問がともに追及すべき極めて重要な課題である。この内容は学会誌、「民族学研究 第13巻第3号」に収録されている。

民族学者の岡正雄が、主として神話・宗教から民族（種族）の系統を述べ、日本考古学者の八幡一郎が、それを考古学的事実に照らして発言する。また、東洋（オリエント）考古学者の江上波夫は、周辺地域の文化について考古学的側面からユニークな意見を述べる。司会をした民族学者の石田英一郎が、これらを鮮やかにまとめながら、自分の考えを入れて話を発展させる。今まで同じ席に着くことのなかった二つの学問のハイブリッドな展開が、高く評価されるものであった。物証・時間の変遷で考古学に敵うものはないが、それだけでは変化の根源を明らかにし、社会を復元して広範な流れを解き明かすのは困難である。日本考古学で扱える物証は、当時の文化の 10%程度しか残っていないのだから、民族学の成果を取り入れる必要性を感じる。この対談の後、「民族学から見た日本人」「日本民族の源流」などが出版された。

2. 日本人類学会と研究の分野 (Anthropology/Physical anthropology)

東日本では縄文文化の研究に向けて、大森貝塚・小石川植物園・王子西ヶ原・陸平貝塚などが次々と発掘され、明治 15 年 10 月には、太政官令で遺物の貯蔵（収蔵）^{おくだいら}が義務付けられた。当時の太政官は三条実美で、文化財保護法の先駆けをなすものであった。アイヌ研究の必要性が説かれたのもこのころである。明治 19 年「日本人類学会」が創設され、人類学雑誌の発刊をみる。当時これを主導した坪井正五郎が研究項目として示したものが残されている。それは『解剖・生理・変遷・近似動物・住居・貝塚・土器塚・墳墓・人類の区別・言語・家族組織・宗教・工芸・風俗習慣・狩猟・漁労・農耕・衣食住』と 18 項目にも亘っており、ヒトに関する生物学的な分野から、考古学で扱う分野、民俗学や社会学で研究する範囲まで、「総合人類学」の考え方が示されていた。坪井正五郎がコロボックル説を唱えたことはあまりにも有名だが、日本に人類学を普及させようと、日本の各地で 100 回も講演を行ったことはあまり知られていない。今年で没後 100 年になる。

日本の「Anthropology」はドイツ帝国から日本に招かれた医師、E. v. ベルツの流れを汲んでいるとみられる。日本人類学会創立 50 年の 1935 (昭 10) 年に、この学は、人類学・考古学・民俗学に 3 分類されていた。人類学雑誌に載った記事は、これらが 1 : 2 : 1.5 の割合で、考古学が多くなっている。地域別の情報数では北海道・千島が 1 位で人々の北方民族への関心の深さが知られる。武蔵国が 2 位なのは、研究者人口の多さが関係しているのだろう。民俗学と民族学の区別ははっきりせず、科学的土俗学と呼ばれていたのが、当時の考え方を表していて頷ける。民族学は科学的土俗学だったのだ。

有名な鳥居竜蔵は明治 26 年、23 歳で東京帝国大学人類学教室標本整理係として雇われた。生物学を基礎とする坪井正五郎が、文化面すなわち「科学的土俗学」を託したものと思われる。鳥居は遼東半島、台湾、北千島、朝鮮など、当時日本領だった地域でフィールド・ワークを行い、助手、講師と昇進して、人類学教室の文化科学の面を支えた。戦後、北京から帰国されて間もなく 1953 (昭 28) 年に 82 歳で亡くなられた鳥居先生の葬儀には、研究室を挙げてお手伝いした大学もあり、尊敬を集めていたことが知られる。

広く学びたいと願った私は大学院で人類学に進んだ。このとき目的が「日本歴史」から広がって「人類史（誌）」に変わった。文系から理系への交代に日本では不利もあったが、毎週、学科全体で行われる「談話会」で、教室の人々が行っている研究の内容をつぶさに聴き、考えさせられて、人生で最も学ぶことの多い日々だったと回顧している。その時、

教室の人々が取り組んでいたテーマの一端を示すと、日本人の骨の変遷、骨から見た男女の差、化石人類はどこまで遡れるか（人類の起源）、日本人の血液型の特徴、ロコモーション、左利きと右利きなどなど、ほとんどが自然人類学の分野であった。鳥居先生以後も民族学、先史学のスタッフは常におかれていたが、理学部/生物系研究科に属していたために、当然のこととして「人の形質」に重きが置かれた。専門の授業も、地球上の人類の現象的な差を見極める「人種」の基礎が中心で、肌や髪や瞳の色・身体の大きさや形状の比較などに時間が割かれた。現在「人種」研究はすでに過去のものになっている⁴。

教授と院生たちの研究室が並んだ暗い廊下の人類学教室は、必ずしも健康的な明るさは感じられなかったが、ここを巣立った人たちは、日本各地の大学や博物館に就職して、研究者として名を馳せた人が多い。人類学課程のある大学は少ないので、医学部や霊長類研究所、科学博物館が就職先になっていた。また学会などで出会うと、いつも仲間として確かなつながりをもっていた。

第2次世界大戦中に、日本人が進出した南太平洋の島々からもたらされた、たくさんの「民族資料」が、昭和20年代から40年代初めまで「人類学教室」の階段踊場などに収蔵展示されていた。毎日眺めるのが日課になっていて、実測図の作成を手伝ったこともあったが、それらは現在「国立民族学博物館」に収められている。

ここでの私は、「打製尖頭形石器の研究」を修士課程のまとめとし、日本と周辺に打製尖頭形石器を報告書や出版物から拾って、日本の縄文以前に二つの尖頭形石器の時期があることを結論にした。

3. 民族学と民俗学、文化人類学 (Ethnology/Folklore/Cultural Anthropology)

日本の民族学はウィーン大学の W. シュミットの流れから始まると言ってよい。渋沢敬三が私財をつぎ込んで、日本の民族学の発展に貢献した。岡正雄・石田英一郎をウィーンに派遣留学させ、帰国したお二人が核になって「民族学」を日本に植え付けたのである。

渋沢敬三自身も民俗学と民族学に造詣が深く、ご自分の家の一角に郷土玩具から始まる民俗資料を集めた「アチック・ミュージアム」⁵を造り、民族学・民俗学に熱い思いを寄せる若者たちに研究場所を提供した。「APEの会」は多分そんなところで生まれたのだろう。APEは「類人猿」を意味する英語であるが、**A**nthropology/**P**rehistory/**E**thnologyの頭文字をつないだものでもあり、このような分野に興味をもっていた人たちの研究会ということである。アチック・ミュージアムは、1937（昭12）年に渋沢家を離れ、東京都北多摩郡保谷の広い土地に移って「民族学博物館」となった。卒業後、近くの東京都立武蔵野郷土館に勤めた私は、保谷の博物館の「絵馬」の研究を手伝い、閉館前に国内資料 25,000 点、海外資料 6,000 点の入った収蔵庫を親しく見学し、屋外施設の絵馬堂、水車小屋、奄美大島の高床倉庫を、郷土館に引き取る手伝いをした。アイヌの人たちが二風谷から来て造った「チセ」は、新しく出来る「国立民族学博物館」に移築するとのことだった。1962（昭37）年、保谷の民族学博物館は閉館している。

第2次世界大戦末期から、復興が軌道にのるまで研究は一時中断したが、戦後再開された後、岡正雄は東京都立大学（現、首都大学東京）に社会人類学の講座を、石田英一郎は東京大学に文化人類学の講座をそれぞれ新設し、主任教授となった。初めから大学院をもち、東日本ではここで教育を受けた優秀な学生たちが巣立って行った。岡正雄はほかに、

明治大学（政治経済学部）や東京外国語大学（アジア・アフリカ言語研究所）で、石田英一郎は定年後、東北大学（日本文化研究所）で、それぞれ主任教授を務めた。このことが文化人類学の教育機関を増やすのに役立ったと思う。

『音^{おん}』が同じために紛らわしい民族学と民俗学は、両方とも文化人類学のなかに包含されている。岡正雄は、「両みんぞく学」の違いについて、民俗学は自己の単独民族の研究、民族学は自己以外の多民族の研究と言っている。ドイツ語で単数のVolkskundeと複数のVölkerkundeに相当するという、明解な説明がなされた。アイヌ研究は、アイヌの人たちにとっては「民俗学」、日本人にとっては「民族学」ということになるのかも知れない。

柳田（ヤナギタ）國男が庶民の残した事象、事物に着目し、日本民俗学を創設したことは広く知られている。書き残されなかった衣食住、年中行事、人生儀礼、農耕儀礼などを弟子と共に探り、多くの成果が残されたが、これらは日本の生活文化の根幹をなすものである。またそれらの文化の移動についても理論を組み立てられた。柳田先生が90歳の頃、授業の一環として受講生全員で東京世田谷成城のお宅にうかがったことがある。その書斎は高い天井まで本がびっしりと整理され、図書室というよりは、荘厳な聖堂のようであった。それは大学に根をもたない学問の書斎の姿だったのだと思う。研究教育の舞台が大学でなかったのは、近代日本では稀であり、後継者の多くない民俗学は、学校教育が後継者をたくさん育てるという意義を認識させるものにもなっている。

話題が弥生時代以前に及ぶと、柳田先生は「そんな文化は日本人のものではない」と言われた。旧石器時代は、「ヤシの実の想い」の延長に入らなかったに相違ない。書斎の資料は、柳田先生が92歳で亡なられたのち、講師をされていた成城大学に移管されたと聞いている。

文化人類学の導入 かつて人類学は形質から決める人種と、文化からまとめる民族の同定、識別が中心課題だったが、今は違う。人類学の節で述べたように、識別は差別につながるし、世界の人種・民族は地球規模で混じり始めているからである。

1955（昭30）年頃に、アメリカ合衆国から「文化人類学」が導入された時、人類学教室の主任教授を引退されたばかりの長谷部言人^{はせべことんど}からは「人類学に形容詞は要らん」と非難されたが、文化人類学は民族学・民俗学・社会人類学を纏めて、一つの研究分野として存在することになった。

アメリカの人類学部は「生物人類学・文化人類学・先史人類学(考古学)」の3部門に分かれており、ここで学ぶ者は全部の部門の単位を取らなければならない。結果として、総合的に人類学を学ぶことになる。生物人類学は「人類の起源と発達」すなわち骨学が中心で、身体の解剖や生理的な部分は、ほとんど医学部に任せている。文化人類学は文化の理論と米国各地の先住民の民族誌、霊的世界や社会構造、言語、物質文化の在り方を探求する。考古学は世界各地の発掘によって知る遺構遺物と文化変化が基本である。総合人類学は、北アメリカの広大な土地を自国とし、さまざまな文化を擁しているアメリカ合衆国だからこそ発達したものだと思う。

J・F・ケネディーが暗殺されて半年、東京オリンピックが開催される1964（昭39）年に、私はアメリカ中西部の大学へ留学した。当時のアメリカの豊かさは日本と格段の違いがあり、人類学部では活躍中の人類学者を世界中から招いて、特別講義や講演を聴く機会を常に作っていた。これぞアメリカの大学と感じたものである。土地の広さを除けば、今

の日本の生活はアメリカに追いつき越えている部分さえあるが、文化系の学問分野ではまだ開きが大きいと感じている。

人類学の研究室や実験室は、一応分野ごとに分かれている。学生は朝から研究室で作業を始め、夕食に帰宅して、夕食後また研究室へ戻り、ほとんど全員が夜の 11 時まで研究に時間を費やす。図書館や博物館はあるが、遊ぶところがほとんどない大学町なので、集中して学ぶことができる。そして学内の年中行事は3分野一緒になって楽しむ。一年を終えた学年末は別れの季節であり、飛躍の季節でもある。研究計画や調査予定を知らせ合い、サポートし合っている姿が目立っていた。

私はこの機会を利用して、かつて文献だけでまとめた米国の「打製尖頭形石器」の出土遺跡や実物を見て回った。サンディア洞穴、クロヴィス遺跡（Black Water Drown）など、その副産物として、アメリカ中西部から南西部の多くの遺跡・博物館を見学、先住民村やその活動に魅了されて、研究の範囲を広げることになる。

4. 民族博物館の仕事は「総合人類学」(General Anthropology)

考古学の研究方法は、綿密な「発掘」を基本とする。層位的発掘で相対年代をつかみ、出土した遺構や遺物の「型式設定」を行って、細かい編年を導き出す。土器があればそれが最も効果的な資料になる。これをもとに関連資料を見極めて、当時の社会の復元に迫る。最近では「ハイテク考古学」とか、物理、化学の助けを借りる方法が盛んだが、それでも人による発掘と整理は基本である。残るものが少ないため全体を知ることが難しく、とくに精神的な分野は多くを民族学に、また近くに文献があれば歴史学に負うところが大きい。

民族学の研究方法は、同じ文化の範囲内で生活する人たちと共に暮らし、参与観察と聞き込み（インタビュー）から見えないものも知って、それを整理し目的別に方法論を組み立てて、考え方や社会構造を導き出す。しかしこの結果からは、その時点でのことは分かるが、時系列の変化は掴めない。古文書など書き残されたものが利用できる場合、それを活かすのは考古学と変わらず、また考古学の成果が助けになる。何年もの時間を経た後に、再び調査することも可能であろう。

考古学と民族学は、ともに社会的な文化を求めながら、研究方法が大きく違うのである。確かに対象にする時代が異なることはあるが、お互いに同類の学として、知識を共有するのが理想的なはずである。かつて「9 学会連合」⁶ が力を発揮し学問を推し進めたように、関連諸科学との連携も必要である。経済的価値がすぐに表に見えない文系基礎科学の分野では、特に連携の効果が大きい。

日本の博物館の多くは美術館を除き、歴史系博物館である。都道府県、市町村には必ず存在し、民間のものもかなり見られる。最近では、歴史民俗博物館として国内で育った文化を纏めているところが多く、北海道では全域を覆うものとして、「旧北海道開拓記念館」がある。

これに対し民族学・人類学系の博物館は非常に少ない。大阪千里の国立民族学博物館（民族系）と、東京上野の国立科学博物館（人類系）の他は愛知県犬山にある民間の博物館リトル・ワールド（民族系）だけとあって良い。そういう日本の風土の下にあって道立北方民族博物館は、世界の北方の文化を網羅した民族系の博物館で、北方の人類文化を広く社会に提供する機関である。ここに、北海道開拓記念館との棲み分けも明らかになって

くる。考え方としては空間的にも時系列的にも広い「総合人類学」的視野をもち、関連諸科学も取り入れた博物館であって欲しいと思う。

最後に「民族学」の名称は、文明社会の外にあるものがイメージされ勝ちなので「文化人類学」と呼ばれるよう変わって行く方向が示唆されている。

終わりに

私が約半世紀前に初めて社会人として勤めたのが、「考古学と民俗学」を中心とする博物館だった。その頃、知識は足りないながらも、毎日が工夫の連続、多くを学び新鮮であった。その後、長い社会生活を大学で教員として過ごし、アラスカをフィールドに調査を重ねたが、研究テーマではずっと考古学と民族学の融合を目指してきた。今また、人生の終わり近くに、「民族学と一部考古学」の博物館に勤務し、かつての教え子たちと切磋琢磨しながら学ぶ幸せを噛みしめている。

注

*本稿は2013年10月26日、北海道立北方民族博物館で行った講演（北海道立北方民族博物館 主催／北海道民族学会 後援）をもとに、北海道民族学会編集委員会の求めに応じて執筆したものである。

- 1：第1次考古学ブームは、考古学を東京帝国大学人類学選科で学べるようになった昭和初年の時期を指す。第3次考古学ブームは、東京オリンピック（1964）、列島改造論が提唱され、考古学の発掘が収入を得られる仕事になった時期である。
- 2：最寄貝塚は北海道網走市にあり、駒井和愛の指導の下東京大学考古学研究室で発掘した調査。登呂遺跡は静岡県静岡市にあり、考古学協会の研究者たちが連携して行った大掛りな発掘調査。鉾切洞窟は神奈川県三浦半島にあり、赤星直忠の指導による発掘調査。
- 3：ジョン・ミルンの墓は、函館にある。一般に「地震」の研究者として宣伝されているが、地質の層位を考古学の層位認定に使い、文化の前後関係を知る方法として利用した功績は大きい。
- 4：人種は認識することで「差別」が生まれ、20世紀後半には人類全体の大きな問題に発展してしまった。また21世紀には地球上で自然に交配が重ねられ、次第に判別することが意味を持たなくなっている。
- 5：Attic=屋根裏部屋の Museum=博物館。欧米の家の屋根裏部屋は、常時使用しないものを入れておく場所。物置とは違い整理された格納場所で、日本では納戸であろう。
- 6：「9学会連合」は、渋沢敬三の提唱により戦後創設されたもので、「両みんぞく学会」を中心とする人文科学系諸学会の連合。民族・民俗・人類・社会・言語・地理・宗教・考古・心理の9学会が、それぞれの得意分野を提供して研究に当たり、総合的な成果をあげた。機関誌に「人類科学」がある。

（おかだ・あつこ／道立北方民族博物館館長・北海道民族学会顧問）